

日本の古寫經と中國佛教文獻 — 天野山金剛寺藏平安後期寫

『優婆塞五戒法』の成立と流傳を巡って

落合俊典

(國際佛教學大學院大學、東京)

大坂府河内長野市にある天野山金剛寺は行基(668-749)創建の傳承を有する古刹であるが、歴史的文献によってその事實を徴することは難しく、ようやく 11 世紀になってはじめて傍證が得られる。一般的に古代中世の由緒ある大寺院に共通して存在していた一切經は、その後の戦亂・火災等で消失したものが多いが、幸いにも金剛寺は四千數百卷の經卷を現在まで傳えている。この一切經は同時代に書寫されたものではなく、過半は鎌倉中期の書寫であるが、古いものは平安中期の 11 世紀の寫經があるように時間をかけて形成された一切經である。

さて、金剛寺一切經中に貴重な寫本 — 後漢の安世高譯とされ、隋代には散逸したとされた『十二門經』 — が梶浦晉氏によって發見されて以來本格的な調査が開始(2000 年)され、今日まで繼續している。本稿ではその後發見された經典のなかの一点、『優婆塞五戒法』について報告するものである。

平成 15 年(2003)の夏の調査の結果、劉宋求那跋摩譯『優婆塞五戒威儀經』(大正藏 No.1503)と想定して書寫した金剛寺本『優婆塞五戒法』は、大正藏本と内容を異にした寫本であることが判明した。本書は奈良時代の 737 年までに日本に將來されたものの轉寫本であろう。

この、長らく失われていたと思われていた金剛寺本『優婆塞五戒法』は、羅什と弗若多羅の共譯である『十誦律』に基づいて在家から沙彌に至る者が遵う受戒規定の作法書であった。成立時期は五世紀中葉頃と考えられる。

落合俊典 OCHIAI Toshinori

1948 年生

國際佛教學大學院大學教授

主要著作 『七寺古逸經典研究叢書』全六卷(牧田諦亮監・落合俊典編) 「大唐西域求法高僧傳の研究」 「二種の『馬鳴菩薩傳』 — その成立と流傳」 「初期譯經と毘羅三昧經」 〈羽田亨稿《敦煌祕笈目録》簡見〉 ほか多數。